

## 「原爆想ひ出の記」

野口 八男

また八月九日が来る。

あれからまる五年になるがその日が巡って来るたびに私の気持はたまらない。当時生々しい事実を記録して置こうと考えて筆を取ったものの結局は原爆で死んだ妻子生前の思い出に終って了った。

悲惨な死方をしたもののえの手向けだと心を励まして肝心の罹災状況を現わそうとすれば余りに心に刺さるとげの痛さに耐え兼ねて筆を投げ出し、慟哭し、果ては心の遣り場に困って幾度び真夜中の山手街にさ迷い出たことか、記憶は生々しく心の中に生きていながらとうとう罫紙四十枚も書いた内にこれを記録することは出来なかった。

当時私は長崎水上署の署僚で階上に在って執務中少数機らしい爆音を耳にして窓から首を出そうとした瞬間にあの閃光を認めて本能的に窓壁の蔭に伏したので硝子窓など微塵になって頭上を越えて向う壁につっ飛んだに拘らず破片で左頬に微傷を負うた丈で身体に異常がなかったのは、これこそ天祐であったろう。

而し同じ時刻に妻子は生死の境に呻吟していたのであった。あの日の原爆で私は家財全部と妻松枝（四三）、長男健一（一四）と大学病院の看護婦をしていた妹と三人を失ったがその中妻の死方は実に惨酷であり、長男の死は余りにも哀れであった。

私は新型爆弾の落下した地点が浦上方面と知って妻子のことが気懸りではあったが公務上の責任感私をすぐ自宅に駆けつけさせることを拒んだ。防空本部との連絡、多発的に附近に発生する火災の消火防止、署員負傷者の処理、海上被害者の救出、火災を起した儘漂流する船舶の処理など一段落つけたのが午後五時前後であったろう。その頃は長崎駅以外は殆んど焼け落ちて終っていた。私は初めて山口署長の許可を受けて城山町の自宅に向けて自転車を飛ばした。もとより自転車で自宅まで行けぬことは判り切っていたが心の逸りは行けるところまで一刻も早く行きたい気持ちで無意識のうちに走り出していた。

長崎駅から先は自転車を押し乍ら前進しつづけたが或は橋が墜ち、或は道路が塞がれていてなかなか捗らず方々を迂廻して城山町市営住宅街に着いたのは午後七時三十分頃であった。その間逢遇した悲惨な地獄絵画の様子は拙い筆でどう現はしようもない。顔の表裏も分らぬように焦げて跣っている人から要求されて「しっかりしなさい、今に救助隊が来る」と励まし乍ら肩の水筒から水を与えたことが幾回あったろう、城山町までの間で破損した水道栓から流れる水を水筒に補給してはこれを繰り返しつつ、とうとう四杯を吞ませて終った。特

に胸を打たれたのは井樋の口巡査派出所前で救助隊の手によって次ぎ次ぎに横穴から運び出されて道路上に横えられた幾十の瀕死者の有様で実に惨鼻の極であった。

城山町一帯は既に完全に燃焼し盡して自宅の方角も判らぬ有様になっている。ようやく見当をつけて探し当てた我家は今や一物も残さず焼けつくして恰も七輪で起された木炭火が燃え盛っている時のような火勢と様相を呈している。私は呆然と立った儘太い息をつくより外なかった、万事終れり！！万が一にも妻子は助かっていまい、静かに瞑目して冥福を祈った。せめて死体なりとその辺にないかと薄暗くなった道路に横っている屍体を順に検めて廻る内に程遠からぬ下水溝に臥している少年の死体を発見して思はず駆けよってゲートルを穿いている外一糸も纏はぬ半焦の少年の身体を愛撫するように撫でながら検めたが結局腹部に残っていたバンドが違っていて長男でないことが判った。嗚呼どうなったのだろう二人共家と一緒に灰となったのか！而し諦められない、私は火のない所を廻って護国神社附近に作られていた横穴を妻子の名を呼び乍らたんねんに探した、屍体も一々検めた、けれども何処にも発見されなかった、暗くなって視力は効かない、力一杯「松枝！健一！」と叫んで見たが何の手耐えもない、絶望感はひしひしと心をさいなむ、嗚呼！嗚呼！とうとう涙が頬を伝って流れる、己むを得ない帰ろう、ついに諦らめて竹の久保側の道路を辿って署へ向った。

その翌日はもう探しに行く気にもなれなかったが同署に勤務していた娘が城山町にいた父母の安否を確かめに行きたいと云い出した。その娘は私の隣家に住んでいた所以我はその所在を知っているが外の署員では判らないのでこれを連れて船で旭町まで渡って再び城山町に赴むくことになった。

午前十時半頃城山町について又昨夜廻った横穴の一つ一つを検めて廻る途中丘の上の畑を歩いていると「父ちゃん！」と叫ぶ声が聞えた、而し当時は道の至るところで動けない子供や大人がその親近者を求めて叫んでいたのも別に気にも止めずに歩を進めると又「父ちゃん！」と聞える、何気なく声の方を向くと遙か下の道路に覆った水槽に一人の少年が腰掛けて右手を高く差し上げ乍ら此方に向いている、「モシヤ」と云う気がしたので「健一！」と呼んで見ると「オーイ」と答える、念のためにも一回「野口健一か！」と呼び返すと「オーイ」と答える。確かに我が子だ！

何と云うことだ諦らめていたのに生きていたのか！私は凡てを忘れてその場で文字通り飛び上って喜んだ。そして連れの娘と一緒に一散に駆け降りた。子供はシャツ一枚に半ズボンを着て裸足でニコニコしていた。身体を検べると左横腹に手掌大の皮下溢血と頭に鶏卵大の瘤が出来ている外は火傷一つない、オ、何と云う幸運だ、私はこの時程嬉しかった事は嘗てなかった、夏の日の暑さも忘れて私は矢継早に当時の模様を聞き訊した。

母親は家と共に焼けたこと、自分の腹部は屋根が落ちた時材木が当たった傷で

あること、昨夜は八幡様裏手の横穴にいて寒かったこと、昨日の朝以来何も食べていないこと、昨日逃げる時は裸足で痛くも何ともなかったが今足裏が痛いのと腰のところが痛んで歩かれず二時間ばかり掛って一町位の道を降って来たこと、降って来たのは下の方で御飯を配給すると云う声があったので出て来たことなど一気に話して呉れた。

私は「よし母ちゃんは明日連れに来ることにして何よりお前を連れて帰ろう」と鉄帽を首の前に掛けて子供を背負って歩き出した。脚が痛いと訴えるので一町位に一度宛降して休み乍ら二人は尚話し続けるのであった。

「父ちゃん人間はね、あんな場合には誰も頼りにならんもんバイ」と父親が二十年掛って覚ったことを子供は一四才で覚っていた。

背の上からボツリボツリ語る罹災の様子は私の胸を締めつけるような悲惨なものであった。あの朝空襲警報が解除になったので親子は横穴から自宅に帰ってホッとして畳の上に長くなって休んでいる時にアノ投弾に逢ったのでアッと云う間もあらせず二人とも落ちて来た屋根の下敷にされて終った。

子供は土だらけになり乍ら屋根を破ってようやく外に這い出した。そして母親を救出する作業を始めた。瓦を一枚一枚取り除いて母親を発見することは出来たが何と云うことだろう母親の上には天井板を束ねてあったのが縦に体を押えて更らにその上に材木が乗っている、材木を切るか天井板を引き摺り出すかしないことには引き出せない、元より鋸もなければ刃物もない、現に母親を見ながら方法がないと知った子供の心はどうであったろう、何とかして救いたい、附近を逃げて行く小父さん達に何回も呼び掛けて救いを求めたが誰も加勢して呉れない、隣の小父さん小母さんも屋根から脱け出して来たが頼んでも見向いても呉れなかった。仕方がないので無理に引き摺り出すことを決意して引き出しにかゝった、母親は何か頻りに話しかけていたが腹痛で悪寒がすると丹前を着て寝ていたのでその丹前を頭から被った儘であるのと早口であるため何を云ったのかよく聞き取れなかったと云う。その内に一軒置いた隣家から火を吹き出して煙りが顔を掩うて呼吸も困難になった。焦りに焦るが思うようにならない、母親はそれを知って「もうこうなれば仕方がない自分は構はないからお前は早く逃げなさい、お前丈でも助かりなさい」と叫んだ、そして更らに「自分の遺骨は佐賀の墓に埋めて呉れ」と云うのが聞えた、子供は途方に暮れた、どうにもならぬので避難する決意をして「母ちゃんさよなら」「健ちゃんさよなら！」と最後の別れを交して煙りに烟せ乍ら泣き泣きそこを離れて人の後について走った。生き乍ら火葬される運命を待ちつゝ、子供を避難させた母親、みすみす火に焼かれる生きた母を残して立ち去らなければならなかった子供の心を想うときはらわたを搔きむしられる思いがする。

子供は一旦水上署に収容したのち幸い来合せた西彼蚊焼村の親類に頼んで八郎岳の麓の布巻に疎開させたのであったが後で思えばこれも失敗の因だったような気がしてならない。十一日の朝灰に埋れた自宅の焼け跡で妻の変った姿と

対面することが出来た。

充分覚悟し乍ら諦らめて生体火葬を受けたと見えて手は胸に組んで両足は揃え喉仏もその儘立派な最後を遂げている、私は嚙ぞ熱かったろう！苦しかったろうとその霊に話しかけ乍ら水筒の水を枕元に手向けありし日の佛を偲びつゝ、一片も残さず遺骨を拾い、持って行った小樽に納めて引き揚げた、そして生前隣組関係で永らく知り合っていた伊良林の光源寺に行って戒名を頂きお経を上げて貰った上暫く預かって頂くことにした。

十三日の昼頃布巻から使いが来て子供の容態が良くないから来るようにとのことで退庁を待ち兼ねて自転車を飛ばして会いに行くと、熱も大したことはなく割合に元気で腰のあたりも大分痛みが取れたとニコニコしていた、これは肉身と会い度かったのだとその心情が判ったのでその晩は側に添寝してやることにした。子供は渴いたものが水を求めるように私の体にシッカリ抱きついて黙って啜り泣いている。思えば八月八日午後九時頃警報が鳴ったので飛び出した儘ゆっくり子供と話す隙もなかった私であった、子供はその間に恐しい死生の間を潜って来たので肉身と初めてユックリ会えた嬉しさがこうさせるのであろう！私も黙って抱き締めてやった。

子供は顔を私の胸に押しつけ乍ら「父ちゃん！母ちゃんは死んだが、これからは僕がどんなことをしてでも孝行するからね」と云う。

私は今でもこのときのことを思い出すと涙が流れる、何と云う素直な子供だったろう、今までも母親が病身であったために家庭の仕事についても、いろんな苦勞をさせた。

「父ちゃんコレ此処の小母さんに頂いたのだが父ちゃんにあげるから食べなさい」と枕元に置かれた梨の一つを是非にと私の手に握らせる、そんなに父に会いたかったのか！私はいじらしさに声も出せなかった。

子供は母親を救うことが出来なかったことに責任を感じて繰り返して残念がっていた。私は夜明けを待って別れたがらぬ子供を悟して山坂を自転車で帰った。未だ戦争中であって見れば一刻も職務を疎かに出来ない。

八月十五日終戦の詔勅が降った、張り詰めていた全署員の顔に不安な淋しそうな而も何となくホッとしたような複雑な表情が浮んだ。戦争は済んだのだ！しかし私の地獄は未だ続いた。十六日の朝又子供の容態が悪いと知らせを受けて三里の道を布巻に飛んだ。

子供は外見上変わったこともなかったが頭髪が脱けると云い乍ら自分で一摘みづつ抜いて見せる、脚や手の一部に班点が出来たと教える、下痢がついたと告げる、どう治療すればよいのか村の医者には判らぬ、長崎へも簡単に連れて行く方法がない、医者薬を与えオモ湯を啜らせて静かに容子を見守りつゝ、夜を迎えたが夜中から熱が出て下痢が激しくなった。子供の話によると昨夜来下痢がついていたが他人ばかりで気の毒だからなるべく我慢して出さぬように努めていたとのことであった。そしてその都度自分で這い出して屋外の便所に通っ

たそうだ。

私が一睡の間もない程下痢は頻繁に続いた、そのたびに背負って外に出たが本人の疲労を考えてオシメやボロを借り受けて寝たまゝ処理するようにした。病人は肉親が来たので安心した様子をしたが下痢の激しさには心細い顔をして私の面をジッと見つめる、私は夜明けを待ち兼ねるようにして長崎に飛んで水上署の船舶ウエスと製氷会社から分けて貰った氷五十斤を自転車につけ戸町の前田医師に容態を話して薬を貰い炎天の下を引き返した。子供はその頃珍しい氷を見て嬉しがった、正午頃からはやゝ落ち着きを見せていたが午後六時頃お粥を勤めたところ「父ちゃん喉に這入らないよ」と云う、それではとオモ湯を入れてやるとこれも通らない、水を与えても呑み込めないと訴える、そして「呼吸が少し苦しくなって声も出しにくくなった」と！ 異状を知った私はその家の人に後を頼んで子供には二時間頑張りなさい長崎から「お医者を持って来てやるから」ときとして又自転車を飛ばした。家を出るとき子供が何とも云えぬ淋しそうな表情を浮べて珍らしく傍にいて呉れとせがんだ、結局は諦らめて「早く帰ってね」と納得したが、この時が親子生涯の別れであろうとは未だ私は知らなかった。

途中天候が変わって篠つく豪雨や雷光に逢ったがようやく長崎に辿りついたもの、その時は恰も進駐軍が今明日中に上陸するから市内の婦女子は避難せよと云う指令が出たときで市内は大混乱に陥っていた。前田医者が梅香崎署におると云うので訪ねると此処も町内会長を集めて協議中で応じて呉れない。水上署に帰って見ると署員の家族持ちはその始末に帰らせた後で残ったものも落ち着きがない。八方奔走したが医者もなければ自動車もない、ついに吉田署長を通じ前田医師を口説き落としモーターボートのはぎで蚊焼に着いたのは午後十一時過ぎていた。帰って見ると子供はすでに「父ちゃんは未だ帰らぬか」と苦しきの中から繰り返して待ち詫び乍ら精根つき「小父さんもう仕方がない、きついから休ませて下さいさよならお世話になりました」と自ら胸に手を合掌して息を引き取って十三分を経過していた、八月十七日午後十一時三十三分唯一つの希望であった子供もついに逝った。「母ちゃんの二七日は二十二日だからそのときは父ちゃんと長崎に行く」と指折数えて楽しみにしていた健一はもう眼を開かない。嗚呼諦められない！ 私は鼻孔につめられた紙を除いてまだ普通以上に体温のある子供の体をゆり動かして名前を呼んで見たがどうして返事がある、組んだ両手はやわらかいの！ 最後に関目会いたかった！

どうせ駄目なら死ぬまで傍にいてやればよかった、肉親の見守りもなく嘔ぞ淋しかったろう！ 終夜子供を抱き締めて慟哭した。

越えて十九日骨にした子供を白布で首に吊って生前子供が連れられて来たであろう山坂道を長崎に向い乍ら此処は何処だよ！ 彼処は何だと話しかけつゝペタルを踏む足の重かったこと！

原爆で肉親を失った人は多い、その人達の胸中も皆一様な悲哀を畳み込んで

いることであろう。

墓も建て、やった、改めて送葬もしてやった。而し生涯を不遇に過させて何  
もしてやれなかった妻と、唯一人しかなかった子供を非業に死なせた悲しみは  
一生を通じて忘れることは出来ないであろう。

来年は七年忌になる妻の遺言通り骨を佐賀の墓に納めてやろう。

昭和二五、七、八、記